

ストリートの地理

— 研究動向の整理と今後の研究課題 —

山 口 晋

概要 近年、都市のストリート、路上、街頭などに着目する論考が増えつつある。その一方で、これらの研究は相互参照されることが少なく、批判的検討を含めた先行研究の整理がなされていないのが現状である。本稿では現代都市のストリートをめぐる関連研究をいくつかの視点から整理する。まず、建築学を中心としたストリートをめぐる空間利用に関する研究について論評し、次に、ストリートをめぐる文化・社会史的研究を整理する。その後、ストリートにおける行為主体の経験やネットワークに着目する研究、ストリートでの実践と空間管理との関係を問う研究についてまとめ、これらの研究動向を整理、検討した上で、今後の研究課題について提示する。

キーワード：ストリート、地理、都市、文化実践、空間管理

序

近年、都市のストリート、路上、街頭などに着目する論考が増えつつあり¹、現代思想、社会理論、都市論などを扱う商業誌や書籍で大きく取り上げられている。具体的に、商業誌では『現代思想』誌の第25巻5号で特集「ストリート・カルチャー」が、思想系建築専門誌である『10+1』誌の34号で特集「街路 Road/Street」が組まれている。また、書籍ではインパクト出版会が『音のカー・ストリートをとりもどせー』、『音のカー<ストリート>復興編一』、『音のカー<ストリート>占拠編一』を出版し

ている。これらの論考には左派的バイアスが強いものもあるが、ストリートでの実践²や運動³とそれに対する管理・排除⁴、監視社会批判⁵、そして建築批評⁶や都市計画⁷などに関する示唆的な論考が収録されている。このような状況は都市のストリートに対して多様で、学際的なアプローチがなされていることを示していよう。また、加藤(2006)が「街路の地理学」と述べるように、都市を観察、記述、考察する際の起点を「路上=街路」に置く研究が、人文地理学を含む隣接分野でみられる。別稿で、加藤(2005)は「街路の地理学」の系譜として、シ

¹本稿で使用する「ストリート」という術語について説明したい。人文地理学やカルチュラル・スタディーズなどの研究者によって編まれ、都市のストリートをめぐる諸論考を収載した、*Images of the Street: Planning, Identity and Control in Public Space*において、編者で、都市社会地理学者のFyfe(1998)によれば、ストリートとは支配と抵抗、快楽と不安といった対立するものが錯綜する場所であるという。また、同書に寄稿している文化地理学者のCrouch(1998)によると、ストリートとは公園、住居、遊び場、パブなど非常に多様な方法で使用され、多様に意味づけられるものであるという。これらの議論から、本稿では通行や交通という機能面だけに着目するのではなく、他者と出会い、時には対立し、意味が読み替えられて使用される空間として

のストリートを想定する。ゆえに、多様な意味づけがなされ、利用される公園や広場もストリートとして含む。さらに、ストリートは後期近代の消費文化の影響を色濃く受けており、現代的な意味合いが強いことから歴史的研究の文脈では「街頭」を使用する。また、上野・毛利は、欧米におけるReclaim The Streets(ストリートを取り戻せ!)などの実践に触れつつ、ストリートは「おしゃれた語感があるが、どうにも日本語で適切な訳語が存在しない」と述べ、その理由として、「日本でこれまで「ストリート」の重要性があまり語られてこなかったことにもよるだろう」と指摘している(2002:49)。また、Reclaim The Streetsの実践についてはクライン(2001)が参照される。

カゴ都市社会学派、ヴァルター・ベンヤミン、シチュアシオニスト、ウィリアム・バンギ、エドワード・ソジャなどの研究について言及しており²、人文地理学や社会学、現代思想、それに加えて、カルチュラル・スタディーズや建築学、歴史学といった学問分野から都市のストリートへのアプローチがみられる。

その一方で、これらの研究は相互参照されることが少なく、批判的検討を含めた先行研究の整理がほとんどなされていない。ますます複雑化し、見えにくくなっている都市空間を理解する上でも、こういった作業は重要だと考えられるものの、さしてなされていないのが現状である。本稿では、上述の「街路の地理学」や加藤（2002）が重要性を提起する、遊歩による都市記述、「ストリート・ジオグラフィー」にも示唆を得つつ、関連研究をいくつかの視点から整理する。まず、建築学を中心とした、ストリートをめぐる空間利用に関する研究（I章）について論評し、次に歴史研究において蓄積がみられる、街頭をめぐる文化・社会史的研究（II章）を整理する。その後、ストリートにおける行為主体の経験やネットワークに着目する研究（III章）、ストリートでの実践と空間管理との関係を問う研究（IV章）についてまとめ、これ

らの研究動向を整理した上で、今後の研究課題について提示する。

I. ストリートをめぐる空間利用に関する研究

ストリートをめぐる空間利用を明らかにする研究は建築学を中心に研究が蓄積されている。例えば、窪田ほか（1994）は原宿の歩行者天国でのストリート・パフォーマンスと、それを取り巻く観客の形態を示した。次に、小平ほか（1995）は日本の芸能史での表現活動やその場所を整理することで、現代都市におけるストリート・ミュージシャンの演奏空間との関係を考察している。さらに、この論考の続編として、大影ほか（1995）は京都都心部におけるストリート・ミュージシャンの演奏場所や時間、形態、通行人の数を数量的に把握した。この研究は現代のミュージシャンの活動場所と中世以来の芸能空間であり、境界領域であった河川や橋梁、宗教施設との関係を読み解こうとしたものである。また、阪田ほか（2001）は大阪のターミナルや商業集積地区といった繁華街におけるパフォーマンスの活動場所の空間特性や分布特性を明らかにした。また、上原ほか（2002）は原宿表参道に出店しているアクセサリーや似顔絵などの露店の種類や出店場所などを描き出した。

²ストリートめぐる様々な実践について、『現代思想』誌に収録されているものとしては、小倉（1997）、武・小倉（1997）が、『10+1』誌に収録されているものとしては、増田（2004）、矢部（2004）が参照される。同様に、『音の力—ストリートをとりもどせ—』では、大熊（2002）、中川ほか（2002）、林（2002）、東（2002）、本山（2002）が、『音の力—<ストリート>復興編—』では、東（2004）が、『音の力—<ストリート>占拠編—』では、大島・天野（2005）、近藤（2005）、山口（2005）が収録されている。

³ストリート、街頭をめぐる運動やデモについては、外山・鹿島（1997）、陣野ほか（2002）、粟谷（2004）、稲葉（2004）、小田・酒井（2004）、ALAKIほか（2005）、ECDほか（2005）、二本（2005）が参照される。

⁴ストリートをめぐる管理や排除の動きを取り上げたものとして、酒井（2002, 2005）、クレスウェル（2004）、本山（2004）、原口（2005）、山川（2005）が参照される。

⁵五十嵐（2004a）、毛利（2004）を参照。

⁶隈・森川（2004）を参照。

⁷石川（2004a, b）、織田（2004）、木下（2004）、ゴールド（2004）、中谷（2004）、山崎・山田（2004）を参照。

⁸これらの論者がいかに都市空間を捉えてきたのか、その街路をいかなる足どりで歩いてきたのか、そういった「かまえ」を分かりやすく論じたものとして、加藤政洋・大城直樹編『都市空間の地理学』をあげることができる。その各章で、シカゴ都市社会学派については山口（2006）が、ヴァルター・ベンヤミンについては大城（2006）が、シチュアシオニストについては南後（2006）が、ウィリアム・バンギについては原口（2006a）が論じている。同書では、これらに加えてミシェル・ド・セルトーについて、森（2006）が簡潔に論じている。また、エドワード・ソジャが「路上の地理学者」であることについて分かりやすく論じたものとして、加藤（2004）が参照される。

これらの研究の特徴としては、パフォーマーの活動の種類や時間、露店店主、観客といったストリートでの活動に関するアクターの人数や密集度などを数量的に把握し、その形態に着目することがあげられる。さらに、数量化した活動の種類や場所をカテゴリー化することも共通する特徴である。これらはアーティストの活動や活動場所といった空間利用を実態的に明らかにしたという点で、それぞれの研究目的を果たしているといえる。しかしながら、これらはパフォーマーの数量的把握と分類にとどまっております。パフォーマーや露店店主などの意識や経験、その活動の意味については、ほとんど言及されていない。調査手法が観察を中心とした数量的把握であるため、活動する者の意識を深く考察するまでにはいたっていない⁹。活動する者の意識やその活動の意味を捉え返すことは、後述するように、その活動空間であるストリートをめぐる諸力を逆照射することにつながる。さらには都市空間をめぐる権力をあぶりだすことが可能となる。このような行為主体の意識や経験に着目する研究について整理する前に、もうひとつの研究視座である歴史研究からのアプローチを整理する。具体的には、近世、近代における大道芸など、ストリートをめぐる文化・社会史的研究について取り上げる。

II. 街頭をめぐる文化・社会史的研究

街頭をめぐる文化・社会史的研究について、大道芸研究や芸能史、演芸史研究などをあげることができる。川添 (2000) は江戸期の大道芸の種類や活動内容を整理、分類することで、大

道芸研究に関する基礎的データを提示している。また、大道芸は小屋で行う「見世物」と関係も深く、近年、それに関する資料や解題も提出されている¹⁰。同様に、添田 (1982) は「てきや」の生活について取り上げ、親分・子分の関係を示す原資料や浅草の縁日における露店の「場わり」の図、デパートなどの商業資本の進出に抵抗するピラなどの歴史的資料を豊富に提示している。これらの研究は近世、近代都市の街頭とそこでの生活実践を示す基礎資料としての価値が高い。資料的価値という点では、戦後日本のストリートから湧出していた若者文化の詳細な記述も散見される。例えば、馬淵 (1989) は戦後日本のストリートを含む、「族」文化について分かりやすくまとめている。また、アクロス編集室 (1994) は馬淵の研究以降の80年代中盤から90年代中盤までの「ストリートファッション」も含む、戦後のストリートファッションについて取り上げている。この研究では、その当時の路上で撮影された写真を使用し、それに詳細な解説を加えており、同時代的なストリートの状況を把握できる資料として重要である¹¹。だが、資料的性格が強いゆえに、一部の例外を除いて大道芸や見世物などの種類の整理や分類にとどまっている。当時の都市の街頭においても管理権力による取り締まりや空間管理などが発現しており、それらを記述することが今後は必要となろう。

このような課題をある程度乗り越えている研究として、例えば、石塚 (1991) は明治初期の東京の盛り場や道路での大道芸人の活動が、東京の近代化とともに規制されていく過程を明ら

⁹また、上述の大影ほか (1995) の研究は、一般的理解による中世以来の都市の芸能空間と現代都市におけるミュージシャンの活動場所の関係を問うているものの、現代のミュージシャンの活動場所が当時の芸能空間といかに重なるのか、重ならないのか全く明示されていないという問題がある。

¹⁰例えば、上島 (1999) や川添 (1992) を参照。また、北田 (2005) は江戸期の香具師の口上と「広告」であった「引札」というメディアの関係について興味深く論じている。特に、「第1章 第1節 見世物のなかの／としての「広告」」が参照される。

¹¹これらの研究以外に、90年代を中心に2004年までのストリートファッションを分析した渡辺 (2005) の研究が参照される。また、難波 (2007) はプリティッシュ・カルチュラル・スタディーズの「ユース・サブカルチャーズ」研究やアメリカ社会学の系譜から示唆を得て、膨大な文献、資料を引用しながら、戦後日本の「ユース・サブカルチャーズ」に関する具体的、歴史的な把握と記述を目指している。その文献の引用方法に問題がないわけではないが、分析枠組みを持たず、資料開陳の色彩が強かった先行研究とは、全く異なる興味深い研究である。

かにした。石塚は大道芸人の活動が消滅していく過程を、交通・風俗関係の取り締まりの変遷や当時の警察統計、新聞記事などによって傍証しながら明らかにしている。大道芸人の人数などの数値的根拠には弱さがあるものの、東京の近代化とそれに伴う空間管理のありようを取り上げた興味深い論考である。また、森（2000）は戦後の日本における大道芸の消滅と復活について取り上げている。猿まわしやパントマイムなどをやる大道芸人に対して個人史的な聞き取りを行ったり、聞き書きや自叙伝を分析したりすることによって、戦後の都市の大道芸をめぐる規制、管理と都市空間の変容について論じている。さらに、神崎（1993）は近世から現代までの大道芸の変遷を東京の盛り場とのかかわりから論じた。とりわけ、上野公園・不忍池でタンカバイ（口上売り）をする香具師カキシの語りから、露店の常設化や道路交通法などの法規制によって、タンカバイが衰退していったことを鮮やかに描き出している。大道芸ではないものの、近代都市の街路をめぐる「騒乱」と「群集」を取り扱った研究として、中筋（2005）は近代東京の「都市騒乱」における「群集」について、既存の資料や歴史研究を批判的に再検討しつつ、考察している。日比谷焼打事件、大正政変、東京の米騒動といった騒乱を題材として、群衆行動を実録画や知識人の対談、警察資料などから明らかにしている。このような群衆行動は、中筋が述べる「群集による主体性の遂行」であり、社会学での群集論を参照しつつ、群衆が歩く経路や、焼打、演説が行われた場所を詳細にマッピングしている点も興味深い。

これまで、近世から現代にかけての都市の街頭／ストリートをめぐる文化・社会史的研究を整理してきた。これらの研究を踏まえた上で、次章では現代都市のストリートで活動する行為主体の意識や経験に着目する研究について論評する。

III. ストリートにおける行為主体の経験やネットワークに着目する研究

ストリートにおける行為主体の経験やネットワークに着目する研究は、近年、社会学や人文地理学、ポピュラー音楽研究などでみられる。

まず、教育社会学や都市社会学における研究では、新谷（2002）は大都市郊外の駅前広場で活動するストリート・ダンサーが「たまり場」としての場所、時間感覚、金銭感覚を共有する「地元つながり文化」を優先することを明らかにした。新谷によると、この「地元つながり」には二つの意味があり、ひとつはダンサーが「地元」とよぶ、同じ中学、近隣の中学の同級生や先輩、後輩とのつながりを基盤にしているという点である。いまひとつは上述した場所・時間・金銭を共有する「共同的关系」を職業的達成よりも重視しているという点である。それゆえにストリート・ダンスの活動場所や自宅などの「たまり場」での経験が、「地元つながり文化」をより強化し、だからこそ家庭や学校からの逃避、さらに無業やフリーターへと導いていく機能をもつことを示した¹²。

また、田中（2004 a）はJR 土浦駅西口広場にスケートボードの専用「パーク」が設置されていく過程を、設置に関わる主要アクターへのフィールドワークや聞き取りから明らかにしている。スケートボーダーの活動は建造物の破損や騒音などで、地元住民と問題を引き起こしていた。だが、そのような問題を受けたスケートボーダーがスケボーショップの経営者や地元市議会議員、前助役などの各アクターと連帯して、市当局に働きかけることで「パーク」の設置が決定していったプロセスを明らかにした。さらに、スケートボーダーはこの設置活動で構築された社会的ネットワークを通じて、「土浦再生」を掲げる市民ネットワーク組織の「ゆるやかネットワーク土浦」の会合にも参加し、他のアクターと意見を交わすまでになってきたというこ

¹²後の論考で、新谷（2007）はストリート・ダンサーの進路選択プロセスに、何らかの目的を持ちながら生活手段を得ることができる「道具性」と情緒的安

定をはかっていくことができる「表出性」の機能を見出している。

とを示した。同様に、田中 (2004b) は JR 土浦駅西口広場で活動する若年肉体労働者のスケートボーダーへ聞き取りや参与観察を重ねている。これによって明らかになったことは、その広場の若者がスケートボーダーとして生きていくことは日常生活の単なる「一部分」ではなく、そのような若者自身に生きる「意味」を備給する「文化」を創出しつつあるということである。だが、そのような文化は肉体労働者としての意識を弱めたり、日々の生活における仕事や健康などの不安を隠蔽したりする作用があるがゆえに、労働者としてのスケートボーダーの「周辺化」を無意識のうちに促進したり、スケートボーダーがそうした「周辺化」を進んで受け入れたりする可能性があるという¹³。

これらの研究は、若者が活動するストリートなどと労働現場や学校、家庭など、ストリート以外の空間との関係を捉えるものであり、同時に、そのような空間で活動する若者の経験や意識、さらにはネットワークの構築を明らかにするものであった。また、これらは若年層を対象とする労働政策の再考を示唆したり、若年層の労働意識調査などでは捉えられない若者の生のありようを提示したりするという点で重要であった。

社会学以外でもストリートの若者の意識やネットワーク構築に着目する研究がみられる。近年の人文地理学では、鳴尾 (2008) が兵庫県姫路市のスケートボード広場、「スポーツパーク」の形成過程を、それに関わるアクターの諸関係を示しながら明らかにしている。鳴尾は「みんなでスポーツパークを造ろう会」の署名運動を取り上げ、この運動に関わった中心人物 A と運動に参加した高校生、当事者であるスケーターの 3 者の立場から検証した。さらに、市議会に出されたスポーツパーク設置の請願は、当初、共産党議員の紹介で行われたため、議会から拒

絶されたのだが、衆議院総選挙とそれへの立候補者が、票獲得のために利用したことによって、政治的意味を帯び、市当局と市議会との間で、この活動が翻弄していく様子を明らかにした。田中 (2004a) が述べる、若者による社会的ネットワークの構築とも重なるところがあるものの、鳴尾の研究は、より「都市の政治」に着目した研究であり、スポーツパークという場所をめぐる、政治的、社会的諸関係を明らかにした労作である。

三木 (2006) は大阪・キタの歩道橋界限におけるストリート・ミュージシャンやストリート・アーティストといった「路上活動者」の活動を取り上げている。三木は路上活動者の活動分布を時間・空間的パターンから確認した上で、路上活動者が出演するイベントやテレビ番組、観客といった「社会的環境」との社会的ネットワークを詳細に描出している。また、三木は歩道橋界限での路上活動がバンドル化し、それによってインターネットなどヴァーチャルな空間を含むさまざまな人間関係が構築され、社会的ネットワークが再生産されていくさまを経験的に明らかにした。

ストリート・ミュージックあるいは、ストリート・ミュージシャンを研究対象とするポピュラー音楽研究では、演奏するミュージシャンの意識や感覚を捉えようとするものが散見される。例えば井手口 (2004) は賞賛や収入などの評価を得る、「芸人」としてのストリート・ミュージシャンではなく、「芸を演じる」という感覚を持っていない「非-芸人」としてのストリート・ミュージシャンが増加していることを指摘し、なぜこのようなミュージシャンがストリートで活動しているのかを明らかにしようと試みている。井手口は「非-芸人」としてのミュージシャンが、なぜ大衆の目に触れるストリートで活動しているのかという問いを立てる。井手

¹³このような状況は、ウィリス (1996) が描いた、イギリスの労働者階級で反抗的な高校生である「野郎ども」が、高校の教師や恭順的な生徒に反抗し、それを軽蔑するがゆえに、労働者階級の劣悪な環境や

仕事を自らものとして「主体的に」選びとっていくという階級再生産のプロセスとも重なる。また、新谷 (2002) も、田中 (2004b) も、ウィリスの研究に言及している。

口は聞き取りから「非-芸人」としてのミュージシャンが、必ずしも歌を聴いてもらわなくていいと言いつつも、やはり通行人に聴いてもらえれば嬉しい、と語ることから、「非-芸人」としてのミュージシャンの実践が、ごく一部の「内在的な他者」とのコミュニケーションであるということを示した。

また木島（2006）は上述の井手口の研究にも触れつつ、ストリート・ミュージシャンの増加は、ストリートに対する安心感の高まりが大きいと述べ、それが「路上文化」が定着した要因であることを示した。さらに、ストリートにおいて、自由に活動していいという感覚は、行為主体のみならず、警察や自治体にも波及しつつあるという。この自由というのが、どれほどの意味なのか、その他、法制度との関連を問う必要があるものの、いずれにせよ、これらの論考は、ストリート・ミュージシャンの意識や感覚に迫って、その行動様式を描き出そうとする研究である。

南田（2002）は大阪の梅田、難波、天王寺、京橋といった盛り場におけるストリート・ミュージシャンの実践を取り上げ、これらの実践が公共空間を私的空間化したり、演奏時に周囲に配慮しなかつたりする点で、基本的に「エゴイスティック」なものであると指摘する。さらに、多くのミュージシャンが集中し、競合するようになると、アンプやスピーカーを使用するバンドなど「単一のエゴ」を解放するミュージシャンが現れ、音量は過剰となり、取り締まりの対象となるという。

さらに、水谷（2005）も韓国・ソウルの大学路におけるストリート・ミュージシャンと聴衆との実践から、韓国の伝統的な芸能空間である「マダン」の特徴を読み取り、描出している。李（2003）はやや図式的ながらも、聞き取りなどの質的調査により、東京におけるストリート・ミュージックを「都市サウンドスケープ」という観点から解釈している。海外では、Tanenbaum（1995）がニューヨークの地下鉄におけるストリート・ミュージシャンの活動と

聴衆への詳細な聞き取りから、その活動をめぐる管理のポリティクスについて明らかにし、ミュージシャンと聴衆などとの間に「束の間の共同体」が構築されることを見出している。

本章では、現代都市のストリートで活動する行為主体の意識や経験、ネットワークに着目し、それを読み解こうとする研究を取り上げてきた。このような行為主体の実践はストリートを舞台に繰り広げられることから、管理権力にさらされることになる。次章では、そのような行為主体の実践と都市空間における規制、取り締まりに関する研究を取り上げる。アーティストの活動を取り締まり、都市空間を管理する代表は警察だが、近年、ストリートを含む都市の空間管理が強化されつつある。ストリートをめぐる実践と空間管理の関係について整理するならば、現代都市の空間管理の議論をレビューする必要があるだろう。まず、現代都市において進行しつつある空間管理に関する議論を概観した上で、アーティストの実践と管理を取り巻く研究を整理する。

IV. ストリートでの実践と空間管理との関係を問う研究

(1) 現代都市における空間管理

近年、社会の「空間管理」が進行しつつあるといわれている（阿部・成実 2006）。阿部・成実によると、現代社会における空間管理の特徴とは、潜在的な脅威や危険を見張ることが日常化しており、その一方で、空間をくまなく監視することが、安心・安全を確保するという点で人々に楽しさや快適さを約束しているという（2006：8）。実際、都市のストリートに目をうつせば、監視カメラが次々に設置され、そのような状況に対する批判的論考もみられる。例えば、斎藤（2004）は東京都杉並区の監視カメラ設置に関する専門家会議事録を分析することで、その設置の有効性が議論されないままに監視カメラ設置が議決していく過程を明らかにした。また、小倉（2003）は監視カメラによる空間管理強化について、ベックのリスク社会論

や社会システム論を手がかりに監視社会批判を展開している。小倉によると「犯罪可能性」を取り除くために、監視カメラなどでセキュリティを強化すればするほど、それから漏れ落ちる潜在的な恐怖や脅威への不安が増大し、際限のない管理強化がなされるという。その結果、都市空間のゾーニングや、潜在的な脅威をもつ集団の隔離が進行することになる。このような特定集団の隔離や空間的分断は、デイヴィス (2001) が『要塞都市 LA』で描いたロサンゼルスロサンゼルスの都市的現実でもある。デイヴィスによるとロサンゼルスでは都市計画や建築、警察機構の大規模な連携により、都市貧困層の隔離、排除が生まれているという。また、社会が脅威を認識するのは、実際の犯罪率の高さゆえではなく、セキュリティという概念が拡大していった結果であるという。酒井 (2001) も述べるように、「<セキュリティ>が上昇」していくことで、潜在的犯罪者への不安が増大し、セキュリティの論理の暴走を食い止めていた「たが」である「市民社会」がはずれ、分解していく¹⁴。また、近年の空間管理は IT の進展に伴い、変容しつつある。ライアン (2002) は「バイオメトリクス (生体認証)」によって身体が「データベース化」されることを指摘する。ライアンによると近代のある時期まで監視対象は人の身体だったが、現代では「身体部位」がその対象となり、「身体の消失」と「個人を再一身体化」することが監視社会論のキー概念になるという¹⁵。人間の身体を監視し、秩序に適合する人間を作り出すということは、フーコー (2005) が論じる「規律訓練」すなわち、身体を自己規制できる主体に形成し、内面をもつ道徳的な主

体を作り変えていくこととも重なる。しかしながら、ライアンが述べる監視社会とはフーコーが論ずる一望監視パノプティック的な監視が発現する社会というよりも、ドゥルーズ (2007) が「規律訓練型」の権力の次に到来を予兆した、人の行動を物理的に制御する「管理型」の権力や「管理社会」のより具体的な状況といえよう¹⁶。

これらの論考は批判理論などを参照した社会学的研究を中心としており、そのような影響を受けて、近年、人文地理学でも都市の空間管理や排除に関する論考が増えつつある。

酒井・原口 (2005) は大阪・天王寺公園の青空カラオケ屋台が公園整備という名目で排除されていったことを、屋台店主への聞き取りや管理側の大阪市の思惑から明らかにした。この排除のプロセスについては原口 (2005) でも論じられている。また、原口 (2006b) は「集客都市」という名のもとで開催された大阪市の世界バラ会議によって、大阪城公園、鞆公園の野宿生活者が強制的に立ち退かされたことを示した。森 (2006b) はフーコーやライアンの研究にも触れつつ、都市再開発とジェントリフィケーションが都市の消費空間化を促進する一方で、ストリートを含む都市の公共空間が民営化され、公共空間の管理や特定の集団の排除が強化されることを論じた。杉山 (2003) は英語圏の「若者の地理」に関する理論的、経験的研究を幅広く渉猟、展望しつつ、若者が都市の集客には欠かせない存在である一方で、逸脱するものとしてもみなされ、公共空間から排除されることがあると論じている¹⁷。それでは、以上のようなストリートをめぐる管理に対して、アーティストはどのような実践を繰り広げているのであ

¹⁴同様に、酒井 (2004) ではキング牧師の論じる「恐怖の治療法」が参照され、「マジョリティの恐怖」は現実の危険とは必ずしも相関関係がなく、それゆえに「理性」によって歯止めをかけることが困難であると論じられている。

¹⁵さらに、ライアンはその後の論考で、監視には「配慮」と「管理」の両義性が備えられていることを強調しつつも、9・11以降に監視もののものが「管理」や「統制」に大きく傾斜していったことを批判している (ライアン 2004)。

¹⁶ライアンの監視社会批判から、フーコーの「規律社会」、ドゥルーズの「管理社会」について分かりやすくまとめたものとして鈴木 (2005) を参照。また、東・大澤 (2005) の対談ではフーコーの「規律訓練型権力」からドゥルーズの「環境管理型権力」への流れが解説され、フーコーの「規律訓練型権力」とセットで理解されていた「生権力」について、より「動物的」な生権力を考察しているアガンベンの仕事が参照されながら、まとめられている。

うか。次節では、アーティストの文化実践と管理に関する論考を取り上げる。

(2) 現代都市のストリーートをめぐる文化実践と管理

管理に対してどのような実践が、あるいは、ストリーートをめぐる文化実践に対してどのような空間管理がなされているのであろうか。

まず、スケートボーダーの「空間的实践」について、ルフェーヴル (2000) の『空間の生産』に依拠しつつ、まとまった研究を発信しているのが建築学者のイアン・ボーデンである。ボーデン (2006) によると、1970年代はスケートパークという合法的な空間、すなわち「建造された空間」におけるスケートボーディングがなされていたが (75-110)、1980~90年代にはスケートボーダーが「都市エレメント」の新しい使用法を創造する、都市空間の「流用¹⁸」がみられるという (238-263)。この「流用」される空間とは「ストリート、小さいロータリー、都市広場、小さいショッピングモール」といった「日常空間」であり、ルフェーヴルの言葉を借りれば、意味や象徴性を欠く「零度の空間」である (242-243)。このような都市の公共空間を、スケートボーダーは再定義し、その空間を物理的にも、概念的にも占有することで、さまざまな軋轢を引き起こしてきた。特に、公的領域と私的領域が遷移するようなところでは、スケートボーダーはホームレスが経験するような空間的ポリティクス、すなわち、空間管理者による排除や法規制を受けてしまう。ボーデンによると、「都市の管理者」は路面やベンチに凹凸や垂直の仕切りなどの「仕掛け¹⁹」を設置してスケートボーダーが滑走できなくしており、このような管理強化がなされる理由はスケート

ボーディングが空間的、時間的に拡散し、分散した実践であるために、違法行為として規制することが困難であるからだという (327-329)。

日本における「スケーター」の実践について興味深い研究を進めているのが、建築学者で、ボーデンの『スケートボーディング、空間、都市—身体と建築—』の訳者の一人である、矢部恒彦である。矢部 (2002) はカルチュラル・スタディーズのサブカルチャー論などを援用しつつ、スケーターやスケートボード・パークを管理する行政担当者への聞き取りから、スケーターが行政などの空間管理者に直接的に抵抗、対抗するのではなく、都市空間を一時的に、有利に利用することを示している。スケーターによる、このような「都市空間の流用」は、所有者が予期しない空間利用という点で継続していくことが困難である (矢部 2004: 35)。スケーターはパークの「つかのまの利用」を重ねていくことしかできない。だが、その多くは「つかのまの利用」と「継続的な占有」との違いをはっきりと意識しておらず、騒音やごみなどの問題によって地元住民との軋轢を生み、最終的にはパークの使用が禁止されることになるという (矢部 2004: 35-36)。そのような事態を避けるために、スケーターは管理側と対話し、平和的に交渉する「お目こぼしを勝ち取る戦略」を駆使し、「限られた時間の借りものの場所」であるスケートボード・パークをより長く使用できるようにするのだという (2002: 78-79)²⁰。

社会学者の田中研之輔もスケートボーダーの実践と空間管理との関係について明らかにしている。III章でも述べたように、田中はJR土浦駅西口広場におけるスケートボーダーの空間的実践から、スケートボーダーがスケートボート

¹⁷さらに欧米の地理学における若者と社会統制の関係性を問う論考を展望しつつ、日本の公共空間としてのストリーートをめぐる管理やコンフリクトに関する「若者の地理」を紹介したものとして Sugiyama (2005) を参照。

¹⁸「流用 (あるいは再流用)」とは、一時的にエレメントを借用、引用または盗用することで新しい使用法を創造することである一方で、「転用」とは永久

的な使用又は機能の転換のことを意味する (ボーデン 2006: (10))。また、ルフェーヴルは「転用」(邦訳では「領有」) と「流用」を混同すべきでない」と指摘している (2000: 251-252)。

¹⁹このような建造物は五十嵐 (2004b) が述べる「排除系オブジェ」であるし、かつて丹羽 (1998) が指摘した、野宿生活者に対する排除意識の「空間的表現」そのものである。

パーク設置をめぐる多様なアクターと社会的ネットワークを構築していくプロセス (2004 a) やスケートボーダーが経験するスケートボーディングと劣悪な労働環境での仕事との関係について論じている (2004 b)。また、田中 (2003) はスケートボーダーの活動から「巧みな実践」について見出し、それを三点の実践にまとめている (56-57)。まずはスケートボーダー間で連携したり、それ以外の外部とのネットワークを構築したりするような「協働的な実践」である。次に広場をスケートボーダー自らが楽しむことができる空間へとつくり変える「創造的な実践」である。そして地域住民や警察による空間管理が強化された「ストリート」で、そのような諸力をかわしたり、ズラしたりしながら都市空間の隙間である「ストリート・スポット」を探る「探求的な実践」である。ボーデン、矢部、田中の研究は、都市の空間管理をすり抜けようとするスケートボーダーの多様な実践を取り上げたものであった。それ以外のストリート・アーティストの文化実践と管理の関係を記述したのものとして、拙論 (2002 a, b, 2005) では、大阪・ミナミの盛り場を中心として活動する、ストリート・ミュージシャンやストリート・アーティスト、ストリート・ダンサーの文化実践と警察などの取り締まりなどの空間管理との関係について明らかにしてきた。

また、近年ではストリートの文化実践を、行政が特定の時間、空間に囲い込んで管理する動きがみられる。その代表が東京都の文化政策で大道芸ライセンス制である「ヘブンアーティスト事業」であり、東京都からライセンスを与えられたアーティストである「ヘブンアーティスト」は、指定された活動場所を予約し、その予約した時間に活動しなければならない。このような現代の東京のストリートをめぐる状況を記

述したのが、吉見・北田 (2007) であり、ストリート・アーティストやちんどん屋、サウンド・デモ、グラフィティ・ライターの諸実践について取り上げている。とりわけ、「第1章 ストリート・アーティスト」ではヘブンアーティストの実践と東京都の管理について詳細に分析している。また、拙論 (2006) は吉見・北田の研究とほぼ同じ認識論的地平に立ち、この事業に対する東京都の思惑を議会議事録から明らかにした。さらに、この論考では東京都による管理の動きや意図を明示したことから、拙論 (2008) では、そのような管理側の動きに対してヘブンアーティストが時には不満を漏らし、時には事業を利活用するような「したたかな」文化実践を展開することを記述した。アーティストのこのような実践は、関根 (2004) が「受動の主体性」と論じる、インド・チェンナイにおける「歩道生活者」の日常生活実践とも重なる。歩道生活者の「受動の主体性」とは、都市計画や都市美観の動きに翻弄されつつも、そのような動きを逸らすような点に特徴があるという。さらに、そのような実践はアンダーソン (2003) の秀逸な都市のエスノグラフィーで指摘された、ストリートから得られた戦術的な知恵や暗黙のルールである「ストリート・ウィズダム」とも関連する。

本章では、ストリートをめぐる文化実践と管理の関係について整理してきた。現代都市の空間管理が強まる中で、アーティストは自身が活動する空間を新たに見出そうとしたり、既存の空間を読み替えたりする「創造的な空間実践」を重ねているといえよう。それでは I~IV 章までの研究を踏まえた上で、都市のストリートをめぐる研究はどのように展開していくことが求められるのであろうか。それを提示して結びとしたい。

²⁰拙論 (2005) でも、このような戦略や場所を見出している。大阪・湊町にある OCAT の「ポンテ広場」に集まるストリート・ダンサーは管理者に対して礼儀正しく振る舞い、ダンスイベントの開催の許可を得たり、ごみなどを散らかさない、裸で踊らないなどの暗黙的なルールを決めたりして、管理者と友好

的な関係を構築しながら活動している。その一方で、ポンテ広場は集客力が低下した OCAT にある多目的の広場だが、周囲の再開発の動きにより、その用途を容易に変更できるようになっており、今後、ダンサーが活動する空間として継続するかは不明である。

結

本稿で取り上げ、整理した研究について簡単にまとめる。建築学を中心とした、ストリートをめぐる空間利用に関する研究や街頭をめぐる文化・社会史的研究について、前者はストリートの空間利用を実態的に明示し、後者は近世、近代などの大道芸や香具師などの生活実践を明らかにしており、資料的価値がある²¹。これらの基礎的、実態的な研究をまず踏まえた上で、その次に、もう少し広い文脈に都市のストリートをめぐる実践を位置づけることが望まれる。その際に重要なテーマであると考えられるのが、行為主体の経験や意識、その実践と空間管理との関係についてである。Ⅲ～Ⅳ章で取り上げたストリートで活動するアーティストの経験や意識、ネットワークに着目する研究とそのようなアーティストの実践と空間管理との関係を問う研究は互に関連している。今後はアーティストの意識やネットワークも含む、ストリートでの文化実践と空間管理の双方を捉える研究を進めていくことが求められよう。これが意味するところは、アーティストが活動するストリートとは、アーティストの活動空間であるのと同時に、管理権力によって規制され、取り締まられる空間である。アーティストが管理、取り締まりの空隙を見出し、それをすり抜けて活動するストリートとは、そのような活動がなされるからこそ、管理が強化される空間となる。もちろん、アーティストの活動のみが、ストリートの管理強化の原因ではないものの、アーティストが活動するストリートを起点として、その空間管理の動きや強弱を浮かび上がらせることはできよう。ストリートでの文化実践から都市をめぐる、時には排除したり、時には馴致したりする権力の動きを捕捉することは可能であり、それは近年の都市研究の大きな課題である。だ

からこそ、都市のミクロな空間で作動する管理権力と実践の関係を詳細に捉え返す作業が必要となる。このような作業は、かつて水内（1994）が述べた「都市空間の断片」としてのストリートを積極的に取り上げることとも重なる。さらに、先述したように加藤が「街路の地理学」や「ストリート・ジオグラフィー」と述べる、人文地理学から都市研究へ切り込んでいくための、ミクロな空間から都市を記述していく「かまえ」とも符合する。アーティストがストリートでの文化実践を通じてどのような空間を創造するのか、あるいはどのようなストリートを創造するのか、同時にそのような空間にはどのような諸力が交錯しているのかを記述することが求められる。その際には、都市のストリートを研究対象とする学問分野との「他流試合」も意識しつつ、経験的研究を積み重ねることが肝要であろう。それを慎重に分節化し、明らかにした上で、ストリートをめぐるアーティストの主体性やストリートでの空間創造から生まれる「快樂²²」、ストリートの開放性などについて、理論研究を参照しながら経験的に考察していくことが望まれる。

付 記

本稿は2003年1月に大阪市立大学大学院文学研究科に提出した修士論文の第Ⅰ・Ⅱ章を大幅に加筆修正したものである。修士論文執筆にあたっては大阪市立大学大学院文学研究科地理学教室の先生方、院生諸氏に大変お世話になった。記して感謝いたします。また、本研究には平成18・19年度科学研究費補助金（特別研究員奨励費：「戦後日本の都市のストリートをめぐる実践・管理・表象の文化・社会地理学的研究」 課題番号：173436 代表者：山口晋）の一部を使用した。

²¹このような資料的研究というよりも、近代期の街頭、街路、都市計画をめぐるポリティクスについて、理論的にも、資料的にも明らかにした研究として、加藤（1999）と西部（1999, 2001）があげられる。

²²フィスク（2003）はポピュラーカルチャーを〈知一

権力ー快樂〉のマトリックスに位置づけており、カルチュラル・スタディーズのサブカルチャー論における「象徴的抵抗」のような従来の〈権力ー抵抗〉図式からの脱皮をはかろうとしている。

参考文献

- 東浩紀・大澤真幸 2005. 『自由を考えるー9・11以降の現代思想ー』NHK ブックス (初版2003).
- アクロス編集室編 1994. 『ストリートファッション 1945-1995ー若者スタイルの50年史ー』パルコ出版.
- 阿部潔・成実弘至編 2006. 『空間管理社会ー監視と自由のパラドックスー』新曜社.
- ALAKI・大島茂・KIHIRA NAOKI・シミズはンダーグラウンド・水嶋一憲・酒井隆史 2005. 座談会 踊らされるな, 自分で踊れー関西サウンドデモ座談会ー. DeMusik Inter. (平井玄・大熊ワタル・東琢磨・酒井隆史) 編『音のカー<ストリート>占拠編ー』100-117. インパクト出版会.
- 新谷周平 2002. ストリートダンスからフリーターへー進路選択のプロセスと下位文化の影響力ー. 教育社会学研究71: 151-170.
- 新谷周平 2007. ストリートダンスと地元つながりー若者はなぜストリートにいるのかー. 本田由紀編『若者の労働と生活世界ー彼らはどんな現実を生きているかー』221-252. 大月書店.
- 栗谷佳司 2004. 開かれる「うた」の空間ーフォーク運動とソウル・フラワー・モノノケ・サミットについてのノートー. DeMusik Inter. (平井玄・大熊ワタル・東琢磨・酒井隆史) 編『音のカー<ストリート>復興編ー』54-63. インパクト出版会.
- アンダーソン, E. 著, 奥田道大・奥田啓子訳 2003. 『ストリート・ワイズー人種/階層/変動にゆらぐ都市コミュニティに生きる人びとのコードー』ハーベスト社. Anderson, E. 1990. *Street Wise: Race, Class, and Change in an Urban Community*. Chicago: the University of Chicago Press.
- 石川初 2004 a. 車道の論理. 10+1 34: 79-81.
- 石川初 2004 b. Where the Streets Have No Name. 10+1 34: 86-88.
- ECD・石黒景太・磯部涼・小田マサノリ・二木信 (司会) 2005. 座談会 東京サウンドデモ会議. DeMusik Inter. (平井玄・大熊ワタル・東琢磨・酒井隆史) 編『音のカー<ストリート>占拠編ー』118-143. インパクト出版会.
- 五十嵐太郎 2004 a. 過防備都市2ー戦場としてのストリートー. 10+1 34: 199-207.
- 五十嵐太郎 2004 b. 『過防備都市』中公新書ラクレ.
- 石塚裕道 1991. 『日本近代都市論ー東京: 1868-1923ー』東京大学出版会.
- 井手口彰典 2004. 「非ー芸人」としてのストリートミュージシャンー「他者」の機能を中心にー. ポピュラー音楽研究 8: 3-16.
- 稲葉奈々子 2004. In the Streetー<人々が交差する場・記憶が蓄積する場>を考察するー. 10+1 34: 89-90.
- ウィリス, P. E. 著, 熊沢誠・山田潤訳 1996. 『ハマータウンの野郎どもー学校への反抗・労働への順応ー』ちくま学芸文庫. Willis, P. E. 1977. *Learning to labour: How working class kids get working class jobs*. London: Ashgate Publishing Ltd.
- 上野俊哉・毛利嘉孝 2002. 『実践カルチュラル・スタディーズ』ちくま新書.
- 上原佑貴・後藤春彦・佐久間康富 2002. 都市空間における露店の意義の再考ー原宿表参道における出店の実態からー. 日本都市計画学会学術研究論文集36: 313-318.
- 大影佳史・小平弥史・川崎清 1995. ストリート・ミュージシャンの演奏空間に関する研究その2ー京都における演奏空間の配置に関する調査・研究ー. 日本建築学会大会学術講演梗概集: 187-188.
- 大熊ワタル 2002. 路上・行為・音ー<騙り/語られた音>の風景ー. DeMusik Inter. (平井玄・大熊ワタル・東琢磨・酒井隆史) 編『音のカー<ストリート>をとりもどせー』139-164. インパクト出版会.
- 大島茂・天野裕 2005. パンクスたちの一時的自律ゾーンー限界破滅GIGー. DeMusik Inter. (平井玄・大熊ワタル・東琢磨・酒井隆史) 編『音のカー<ストリート>占拠編ー』86-99. インパクト出版会.
- 大城直樹 2006. ヴァルター・ベンヤミンー^{フラヌール}遊歩者と都市の幻^{ファンタスマゴリー}像ー. 加藤政洋・大城直樹編『都市空間の地理学』17-29. ミネルヴァ書房.

- 小倉利丸 1997. 都市空間に介入する文化のアクティビスト—パブリック・アートの政治性—. 現代思想25-5:65-70.
- 小倉利丸編 2003. 『路上に自由を一監視カメラ徹底批判—』インパクト出版会.
- 織田竜也 2004. 自由への導火線—地中海都市, 街路の祝祭性—. 10+1 34:91-93.
- 小田マサノリ・酒井隆史 2004. 対談 フォークゲリラ・ノーリターンズ!?!—フォークの暗さよ我らに再び—. DeMusik Inter. (平井玄・大熊ワタル・東琢磨・酒井隆史) 編『音の力—<ストリート>復興編—』30-53. インパクト出版会.
- 加藤政洋 1999. 明治中期の大都市における地区改良計画とその帰結—大阪「長町」を事例として—. 歴史地理学 41-3:21-39.
- 加藤政洋 2002. ストリート・ジオグラフィーと都市記述. 流通科学大学論集—人間・社会・自然編—, 15-1:1-11.
- 加藤政洋 2004. エドワード・ソジャとポストモダンの転回. 都市文化研究 3:166-181.
- 加藤政洋 2005. 都市・放浪・故郷—近代大阪と織田作之助のノスタルジア—. 流通科学大学論集—人間・社会・自然編—17-3:127-141.
- 加藤政洋 2006. 街路の地理学. 加藤政洋・大城直樹編『都市空間の地理学』50-51. ミネルヴァ書房.
- 上島敏昭 1999. 見世物研究資料. 鶴飼正樹・北村皆雄・上島敏昭編『見世物小屋の文化史』324-333. 新宿書房.
- 川添裕 1992. 見世物研究姉妹編解説. 川添裕編『見世物研究姉妹編』291-315. 平凡社.
- 川添裕 2000. 『江戸の見世物』岩波新書.
- 神崎宣武 1993. 『盛り場の民俗史』岩波新書.
- 木島由晶 2006. 路上演奏者の公共感覚—心斎橋の弾き語りシンガーを事例として—. ポピュラー音楽研究10:16-39.
- 北田暁大 2005. 『広告の誕生—近代メディア文化の歴史社会学—』岩波書店(初版2000).
- 木下 剛 2004. 私道の誕生—一十八—十九世紀イギリスのステート開発—. 10+1 34:82-83.
- 窪田麻里・大井さやか・上野淳 1994. ストリート・パフォーマンスにおける人間集合について—パフォーマンス空間としての原宿歩行者天国—. 日本建築学会大会学術講演梗概集:1079-1080.
- 隈研吾・森川嘉一郎 2004. ポスト地政学の趣都論—ストリート/建築への眼差し—. 10+1 34:64-78.
- クライン, N. 著 松島聖子訳 2001. 『ブランドなんか, いらない—搾取で巨大化する大企業の非情—』はまの出版. Klein, N. 2000. *No Logo: Taking Aim at the Brand Bullies*. Toronto: Westwood Creative Artists Ltd.
- クレスウェル, T. 著, 日比野啓訳 2004. ナイト・ディスプレイ—コース・ストリートにおける意味の生産と消費—. 10+1 34:137-148. Creswell, T. 1998. *Night discourse: Producing/ consuming meaning on the street*. In *Images of the Street: Planning, Identity and Control in Public Space*, ed. N. R. Fyfe, 268-279. London: Routledge.
- 小平弥史・大影佳史・川崎清 1995. ストリート・ミュージシャンの演奏空間に関する研究その1—都市における演奏空間の配置に関する基礎的考察—. 日本建築学会大会学術講演梗概集:185-186.
- ゴールド, J. R. 著, 加藤政洋訳 2004. ブールヴァールの終焉. 10+1 34:125-136. Gold, J. R. 1998. *The death of the boulevard*. In *Images of the Street: Planning, Identity and Control in Public Space*, ed. N. R. Fyfe, 44-57. London: Routledge.
- 近藤真里子 2005. 東京をタグで埋めつくす—グラフィティライターたちにきく—. DeMusik Inter. (平井玄・大熊ワタル・東琢磨・酒井隆史) 編『音の力—<ストリート>占拠編—』167-183. インパクト出版会.
- 斎藤貴男 2004. 『安心のファシズム—支配されたがる人びと—』岩波新書.
- 酒井隆史 2001. 『自由論—現在性の系譜学—』青土社.
- 酒井隆史 2002. 都市再編と音楽. DeMusik Inter. (平井玄・大熊ワタル・東琢磨・酒井隆史) 編『音の力—ストリートをとりもどせ—』6-25. インパクト出版会.
- 酒井隆史 2004. 『暴力の哲学』河出書房新社.

- 酒井隆史 2005. ニューヨーク・ステイト・オブ・マインダー占拠編・2幕構成一. DeMusik Inter. (平井玄・大熊ワタル・東琢磨・酒井隆史) 編『音のカー<ストリート>占拠編一』184-199. インパクト出版会.
- 酒井隆史・原口剛 2005. 天王寺公園青空カラオケ屋台一公共空間の終焉の光景一. 世界726: 192-200.
- 阪田弘一・柏原士郎・吉村英祐・横田隆司 2001. 繁華街におけるストリート・パフォーマンスの実態とその発生場所の空間特性一コミュニケーションを誘発する都市空間に関する研究一. 日本建築学会計画系論文集541: 123-130.
- 陣野俊史・平井玄・東琢磨(司会) 2002. 対談 八十年代を想起する. DeMusik Inter. (平井玄・大熊ワタル・東琢磨・酒井隆史) 編『音のカー<ストリート>をとりもどせ一』212-235. インパクト出版会.
- 杉山和明 2003. 若者の地理一英語圏人文地理学における「文化論的転回」をめぐる問いから一. 人文地理55-1: 26-42.
- 鈴木謙介 2005. 『カーニヴァル化する社会』講談社現代新書.
- 関根康正 2004. 都市のヘテロトポロジー一南インド・チェンナイ(マドラス)市の歩道空間から一. 関根康正編『<都市的なるもの>の現在一文化人類学的考察一』472-512. 東京大学出版会.
- 添田知道 1982. 『てきや(香具師)の生活』雄山閣出版.
- 高橋靖一郎 2004. 舗装考. 10+1 34: 84-85.
- 武盾一郎・小倉虫太郎 1997. 路上画家武盾一郎氏に聞く一新宿駅西口ダンボールハウス村より一. 現代思想25-5: 56-64.
- 田中研之輔 2003. 都市空間と若者の「族」文化. スポーツ社会学研究11: 46-61.
- 田中研之輔 2004 a. 「若者広場」設置活動にみる都市下位文化の新たな動向一「土浦駅西口広場」設置を求める若年層の諸実践から一. 年報社会学論集17: 120-131.
- 田中研之輔 2004 b. 若年労働と下位文化一スケートボードをする若者の日常一. 伊藤守編『文化の実践, 文化の研究一増殖するカルチュラル・スタディーズ一』58-67. せりか書房.
- デイヴィス, M. 著, 村山敏勝・日比野啓訳 2001. 『要塞都市LA』青土社. Davis, M. 1990. *City of Quartz: Excavating the Future of Los Angeles*. London: Verso.
- ドゥルーズ, G. 著, 宮林 寛訳 2007. 『記号と事件一1972-1990年の対話一』河出文庫. Deleuze, G. 1990. *Pourparlers*. Paris: Les Éditions de Minuit.
- 外山恒一・鹿島拾一 1997. 八十年代後半の青年運動, さまざまな実験. 現代思想25-5: 118-127.
- 中川 敬・大熊ワタル・趙博・本山謙二・粟谷佳司・ぶうち古谷・東琢磨 2002. 座談会 路上の音楽. DeMusik Inter. (平井玄・大熊ワタル・東琢磨・酒井隆史) 編『音のカー<ストリート>をとりもどせ一』72-107. インパクト出版会.
- 中筋直哉 2005. 『群集の居場所一都市騒乱の歴史社会学一』新曜社.
- 中谷礼仁 2004. 虚体バンクとしての路地一課題「軒切りサバイバルハウス」で見えてきたもの一. 10+1 34: 113-118.
- 鳴尾菜樹 2008. 姫路市におけるスケートボード広場の形成過程一若者が体験した「都市の政治」一. 地理科学63-2: 66-79.
- 南後由和 2006. シチュアシオニスト一漂流と心理地理学一. 加藤政洋・大城直樹編『都市空間の地理学』52-69. ミネルヴァ書房.
- 難波功士 2007. 『族の系譜学一ユース・サブカルチャーズの戦後史一』青弓社.
- 西部均 1999. 建造環境としての街路照明と近代都市社会のダイナミズム. 地理科学54-4: 259-279.
- 西部均 2001. 都市計画濫觴期の地理的想像力をめぐるポリティクス一「大大阪」の都市範囲と高速度交通機関路線への投影一. 人文地理53-4: 369-386.
- 丹羽弘一 1998. 路上からの地理学一大阪ミナミからニシナリ釜ヶ崎へ一. 荒山正彦・大城直樹ほか編『空間から場所へ一地理学的想像力の探求一』178-197. 古今書院.
- 林幸治郎 2002. わが漂流のちんどん生活雑感一路上を暮らしの場として再認識してみませんか

- 一. DeMusik Inter. (平井玄・大熊ワタル・東琢磨・酒井隆史) 編『音のカーストリートをとりにどせー』110-133. インパクト出版会.
- 原口剛 2005. 都市空間の奪還—天王寺公園青空カラオケ再考—. DeMusik Inter. (平井玄・大熊ワタル・東琢磨・酒井隆史) 編『音のカー<ストリート>占拠編一』6-25. インパクト出版会.
- 原口剛 2006 a. デヴィッド・レイとウィリアム・バング. 加藤政洋・大城直樹編『都市空間の地理学』85-98. ミネルヴァ書房.
- 原口剛 2006 b. 集客都市の暴力. VOL 01 : 152-158.
- 東琢磨 2002. Embrace the Chaos!—路上・場・パブリック—. DeMusik Inter. (平井玄・大熊ワタル・東琢磨・酒井隆史) 編『音のカーストリートをとりにどせー』290-311. インパクト出版会.
- 東琢磨 2004. おちこち歩む—<路上>の再・成員化=想起のための覚書—. DeMusik Inter. (平井玄・大熊ワタル・東琢磨・酒井隆史) 編『音のカー<ストリート>復興編一』166-197. インパクト出版会.
- フィスク, J. 著, 山本雄二訳 2003. 『抵抗の快楽—ポピュラーカルチャーの記号論—』世界思想社 (初版1998). Fiske, J. 1989. *Reading the Popular*. London: Unwin Hyman.
- フーコー, M. 著, 田村淑訳 2005. 『監獄の誕生—監視と処罰—』新潮社 (初版1977). Foucault, M. 1975. *Surveiller et Punir : Naissance de la Prison*. Paris: Gallimard.
- 二本信 2005. 祭りの余波はまだ続く—でも…DEMO…., サウンドデモ—. DeMusik Inter. (平井玄・大熊ワタル・東琢磨・酒井隆史) 編『音のカー<ストリート>占拠編一』152-166. インパクト出版会.
- ボーデン, I. 著, 齋藤雅子・中川美穂・矢部恒彦訳 2006. 『スケートボーディング, 空間, 都市—身体と建築—』新曜社. Borden, I. 2001. *Skateboarding, Space and the City : Architecture and the Body*. Oxford: Berg.
- 増田聡 2004. ストリートの音—「路上」を領するものたち—. 10+1 34 : 94-96.
- 馬淵公介 1989. 『「族」たちの戦後史』三省堂.
- 三木和美 2006. 大阪キタにおける路上活動者とその社会的ネットワーク—梅田新歩道橋界隈を中心として—. 人文地理58-5 : 489-503.
- 水内俊雄 1994. 近代都市史研究と地理学. 経済地理学年報40-1 : 1-19.
- 水谷清佳 2005. 韓国ソウル・大学路のストリート・ミュージックからみるマダンの文化. 民族芸術21 : 185-192.
- 南田勝也 2002. ストリート・ミュージックの都市空間—大阪都市部のフィールドワークを元に—. サウンドスケープ4 : 54-62.
- 毛利嘉孝 2004. 要塞化する街路—監視テクノロジーと対抗的な文化実践—. 10+1 34 : 106-112.
- 本山謙二 2002. 呼吸するために「そろそろ」はじめること—移民, コミュニティの音楽文化—. DeMusik Inter. (平井玄・大熊ワタル・東琢磨・酒井隆史) 編『音のカーストリートをとりにどせー』26-41. インパクト出版会.
- 本山謙二 2004. 物陰と「居場所」—奪われることを通じて咲かせる花—. DeMusik Inter. (平井玄・大熊ワタル・東琢磨・酒井隆史) 編『音のカー<ストリート>復興編一』136-151. インパクト出版会.
- 森治子 2000. 大道芸. 鶴飼正樹・永井良和・藤本憲一編『戦後日本の大衆文化』269-287. 昭和堂.
- 森正人 2006 a. ミシェル・ド・セルトー—民衆の描かれえぬ地図—. 加藤政洋・大城直樹編『都市空間の地理学』70-84. ミネルヴァ書房.
- 森正人 2006 b. 消費と都市空間—都市再開発と排除・監視の景観—. 加藤政洋・大城直樹編『都市空間の地理学』133-149. ミネルヴァ書房.
- 矢部恒彦 2002. 東京スケートボーディング・スポーツ—パークU, あるいはA区運動広場—. 現代思想31-6 : 72-80.
- 矢部恒彦 2004. 空間を開く—豊かさをうみだす仕掛け—. 10+1 34 : 35-37.
- 山川宗則 2005. 「公園」記—天王寺公園青空カラオケの撮影現場を振り返る—. DeMusik

- Inter. (平井玄・大熊ワタル・東琢磨・酒井隆史) 編『音の力—<ストリート>占拠編—』26-41. インパクト出版会.
- 山口寛 2006. シカゴ学派都市社会学—近代都市研究の始まり—. 加藤政洋・大城直樹編『都市空間の地理学』4-16. ミネルヴァ書房.
- 山口晋 2002 a. 大阪・ミナミにおけるストリート・パフォーマーとストリート・アーティスト. 人文地理54-2 : 173-189.
- 山口晋 2002 b. 規制をめぐるInteraction—ストリート・ミュージック, 排除か容認か—. サウンドスケープ4 : 41-49.
- 山口晋 2005. 大阪・湊町の再活性化とOCATのストリート・ダンサー. DeMusik Inter. (平井玄・大熊ワタル・東琢磨・酒井隆史) 編『音の力—<ストリート>占拠編—』66-85. インパクト出版会.
- 山口晋 2006. 東京都の文化政策「ヘブンアーティスト事業」と現代都市空間. 都市文化研究7 : 50-62.
- 山口晋 2008. 「ヘブンアーティスト事業」にみるアーティストの実践と東京都の管理. 人文地理60-4 : 279-300.
- 山崎泰寛・山田協太 2004. 大都市街路年表<1945-2004>—都市のアクチュアリティー. 10+1 34 : 119-124.
- 吉見俊哉・北田暁大編 2007. 『路上のエスノグラフィ—ちんどん屋からグラフィティまで—』せりか書房.
- ライアン, D. 著, 河村一郎訳 2002. 『監視社会』青土社. Lyon, D. 2001. *Surveillance Society : Monitoring everyday life*. Buckingham: Open University Press.
- ライアン, D. 著, 田島康彦・清水知子訳 2004. 『9・11以後の監視—<監視社会>と<自由>—』明石書店. Lyon, D. 2003. *Surveillance after September 11, First Edition*. Oxford: Blackwell.
- 李理恵子 2003. 東京のストリートミュージック—都市サウンドスケープの生成と変容—. サウンドスケープ5 : 27-34.
- ルフェーヴル, H. 著, 齊藤日出治訳 2000. 『空間の生産』青木書店. Lefebvre, H. 1974. *La Production de l'espace*. Paris: Economica.
- 渡辺明日香 2005. 『ストリートファッションの時代』明現社.
- Crouch, D. 1998. The street in the making of popular geographical knowledge. In *Images of the Street : Planning, Identity and Control in Public Space*, ed. N. R. Fyfe, 160-175. London. Routledge.
- Fyfe, N. R. 1998. Introduction : reading the street. In *Images of the Street : Planning, Identity and Control in Public Space*, ed. N. R. Fyfe, 1-10. London. Routledge.
- Sugiyama, K. 2005. Youth Problems and Urban Social Control : Evidence from a Case of Local Community Policing in Contemporary Japan. *Japanese Journal of Human Geography* 57-6 : 600-614.
- Tanenbaum, S. J. 1995. *Underground Harmonies : Music and Politics in the Subways of New York*. New York: Cornell University Press.

(受付日 2008年6月26日)

(受理日 2008年9月10日)